

TOKYO 2020国際審判員(ITO)インタビュー

TOKYO 2020の国際審判員(ITO)に日本からオリンピックとパラリンピック各1人ずつ選出されました。開催国のITOに選ばれたお二人にお聞きしました。 [ローイング編集部]

2020年東京オリンピック審判員

田畑 喜彦氏

(たばた・よしひこ)

日本ボート協会国際委員。早稲田大学理工漕艇部-中部電力ボート部。1987年C級、1995年B級、1996年FISA国際、2013年A級取得。2016・2017世界選手権、2018ユース五輪、2019世界コースタル選手権などで審判。愛知県ボート協会所属。長野県出身、60歳。



一東京オリンピックの審判員に選ばれた感想は。

大変光栄で関係者に心からお礼を申し上げます。世界から20人しか選ばれず、また一生に一度しか選出されません。まさか日本でのオリンピックに自分が選ばれるとは夢にも思いませんでした。60歳の節目に思わぬビッグプレゼントをいただき、勤務先の上司・同僚や家族も喜んでくれました。

一審判員を志望したきっかけは。

大学進学し熱心に勧誘されて理工漕艇部へ入部し就職の際にも田中精一中部電力会長(元日本漕艇協会会長。故人)に頑張れといわれ恐縮し、継続しましたがアスリートとして十分な戦績は残せませんでした。引退してボートから離れることもできましたが、今後も競技に関わりたと思った時、先輩から誘われ、軽い気持ちで審判を始めました。

一審判員を経験して実感した魅力は。

国内外で新たな出会いが得られた点です。例えば先日、海外で知り合った香港の審判員が志賀高原のスキー場に遊びに来ているのをSNSで知り、急遽合流して楽しみました。ボート以外でも親しい友人ができることが審判の魅力のひとつでしょう。

一TOKYO 2020への抱負を教えてください。

大きな歴史の一コマに自分がいられることに感謝し、頂点を目指して世界各地から集まるアスリートのために最高の舞台を用意したいです。体調維持はもちろん、それまでに可能な限り国際大会へ参加し審判としての感覚を研ぎ澄まし本番に臨みたいと思います。

2020年東京パラリンピック審判員

栗山 俊久氏

(くりやま・としひさ)

日本ボート協会審判委員。慶應義塾高校端艇部-慶應義塾大学端艇部-札幌RC-日本航空ボート部-沖繩漕艇選抜。1993年C級、1997年B級、1999年FISA国際、2004年A級取得。2014世界マスターズ、2019世界選手権などで審判。東京・大阪・徳島各協会を経て2018年から東京都ボート協会審判長。東京都出身、59歳。



一東京パラリンピック審判員に選ばれた感想は。

パラリンピックの審判員に日本から選ばれたのは私が初めてと聞き大変驚いています。これほど光栄なことはありません。心から感謝申し上げます。

一審判員を志望したきっかけは。

高校から挑戦できるスポーツとして塾高端艇部へ入部以来、今日までボートを楽しんでいます。早慶レガッタで審判補助員をしていた30歳の時、佐々木亨先輩(現日本ボート協会国際アドバイザー)から声がけいただき資格を取得しました。

一審判員を経験して実感した魅力は。

仕事柄非常に転勤が多かったのですが、各地の協会に登録するだけで地元にて審判ができ、慣れない土地で、会社以外の仲間から大変支えて頂きました。

パラリンピックの審判に選出された際も、日本各地はもちろん世界の仲間からもメールが殺到しました。

また審判長を担うようになってから、競漕委員会が準備し提供してくれた会場で、選手と同じ目線で、一緒にレースを作っていくのが審判の役割だということ気づき、それが実感できるようになってから審判業務がより楽しくなりました。

一TOKYO 2020への抱負を教えてください。

オリンピック審判員には同一国から1名のみ。また5大会連続選出はなく、次のチャンスは2028 ロサンゼルスです。今回いただいたパラリンピックの機会を大切に次へのステップとするとともに、選手と一緒に最高の舞台が演出できるよう来年の夏に向け心構えを新たにしていこうと考えています。